

# 万葉図書・情報室だより41号

『万葉集』写本の影印とカラー写真版

『万葉集』には、平安中期の桂本をはじめとするいくつかの写本類が伝わっています。その中で、現在刊行されている「万葉集」と名の付くテキスト（歌・訳・解説入り）のほとんどは、西本願寺本（鎌倉後期）をベースに作られています。

西本願寺本がベースとなるのは、『万葉集』全二十巻をすべて残していることが最も大きな理由です。西本願寺本には、文字の色に、墨色だけでなく、いくつかが色が用いられているのが特徴です。

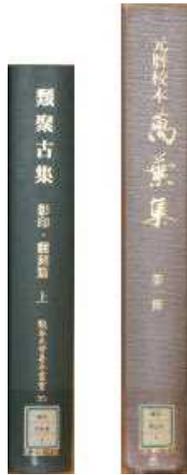


『西本願寺本萬葉集（普及版）』

右の影印本は、モノクロではありますが、巻末の翻刻に色の違いが注記されているので、たとえ原本を見なくともわかるような体裁となっています。しかしながら、ベースとなる西本願寺本の万葉歌の表記がすべて正しい

とは限りません。西本願寺本より古くかつ伝来の異なる写本もあり、そこには異なる表記が書かれていることもしばしば見受けられます。

たとえば、元暦校本（平安時代）や『類聚古集』（平安時代）などがありますが、これらは影印本が刊行されていて、容易に確かめることができます。

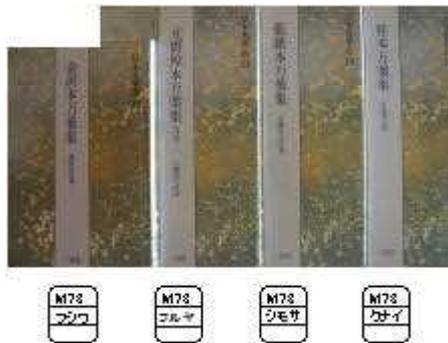


元暦校本は、初期の古写本であると同時に、欠巻も少ないことで、比較のさいに重宝されています。『類聚古集』は、『万葉集』を項目ごとに並べ直した別本ですが、歌は当時のものを引き継いでいると考えられることから重要視されています。

さて、これまでみてきた影印本は、写本の原本を見なくとも済む便利な本と説明してきましたが、如何せんモノクロであるため、影印を見ただけでは、墨色以外の色の判別は困難です。

西本願寺本では、翻刻を読めばわかりますが、そのことを知らなければ、気づくこともないでしょう。

もし、墨色以外の色になる場合は、二玄社から刊行されているカラー写真版のシリーズが有効です。残り巻数の少ない古写本が対象となっていますが、平安時代のカラフルな写本が見たい場合はおすすめです。当館の万葉百科システムでも、カラー画像の一部を見ることが出来ます。



『万葉集』の歌の表記を考える場合、このような複数の写本を比較することが重要なのですが、実は本誌33号で紹介された『校本万葉集』は、網羅的に写本間の文字の違いを一所に集めた本で、わざわざ写本・影印本を見なくとも済むようになっていきます。

といっても、『校本万葉集』も完璧

ではなく、誤りや落ちなども、ところどころ見受けられます。やはり、写本・影印本にあたるのが最良です。

歌の違いが気になる方は、ぜひ影印や写真版を手にとってみてください。なお、写本類のおよその年代や系統は、万葉図書・情報室の片隅に掲げているパネルをご参照ください。

（主任研究員 竹本 晃）

## ○新着図書案内○

- ☆万葉語誌 （多田一臣／筑摩書房）
- ☆家持と恋歌 （小野寺静子／塙書房）
- ☆舍利莊嚴美術の研究（内藤栄／青史出版）
- ☆孝謙・称徳天皇 （勝浦令子／ミネルヴァ書房）
- ☆日本本草学の世界 （杉本つとむ／八坂書房）

## 利用案内

開館時間—午前十時～午後五時半  
休館日—月曜日（祝日の場合は翌日）・年末年始・展示替日

図書室のご利用は無料です  
閲覧でのご利用になります。

コピーサービス 白 黒一枚 10円  
カラー一枚 50円

奈良県立万葉文化館万葉図書・情報室  
奈良県高市郡明日香村飛鳥一〇  
0744-54-1850（代）